

「解放」後の王西彦・試論

西村正男

筆者はこれまで、王西彦と中華民国との関わりについて幾つかの角度から分析してきた。「国民の誕生と読書——王西彦と近代・序論」¹⁾では、王西彦が「国民」へと成長する過程を分析し、「[民間]の表象——王西彦における「知識人」と「民間」」²⁾では教育制度の階段を登り詰めた彼が直面した自らの故郷の表象／代弁の問題を分析した。「[同化]と「母性」の狭間で——王西彦「家鴿」論争を読む」³⁾では、彼が関わった論争から国民国家とジェンダーの問題を考察し、さらに「陰鬱なドン・キホーテ——王西彦の小説に見るツルゲーネフの受容」⁴⁾では日本の侵略、国共内戦下の近代的知識人の立場の困難さを、王西彦のツルゲーネフ受容の中に見出した。これらの論考を通じて、王西彦の思想・テキストを分析すると同時に、中華民国という近代国家が抱え持った諸問題を浮き彫りにしてきたつもりである。

ところで、私は「[民間]の表象」の末尾において、「後に「声」を身につけたはずの知識人までもが「声なき者」になる結果を迎えることになった」と記し、「陰鬱なドン・キホーテ」の末尾においても「この小説 [1950年の『人的道路』]からは、人民共和国建国後、批判精神の基盤を失っていく知識人の運命を否応なく連想させられることだろう」と記した。王西彦、さらには中国の知識人と国家をめぐる密接な関係は、中華人民共和国の建国によって終わりを告げた訳ではなく、国家はより直接的に知識人の思考・行動や運命を左右するようになるのである。

本稿では中華人民共和国建国後の王西彦のテキストを紹介し、これらのテキストがこれまでの論考で見てきたような以前の王西彦のテキストとどのように

1) 『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第1号、1998年。

2) 小谷一郎・佐治俊彦・丸山昇編『転形期における中国の知識人』汲古書院、1999年。

3) 『徳島大学国語国文学』第13号、2000年。

4) 『東方学』第95輯、1998年。

異なるのかを確認し、ひいては王西彦が格闘してきた近代がどのような容貌を現すに至ったかについて素描を試みたい。

土地改革と朝鮮戦争

王西彦は、建国後引き続き大学教師の仕事が続ける⁵⁾一方、ほどないうちに当時の二つの大きな政治的イベントに動員されることになる。すなわち、土地改革と朝鮮戦争である。王西彦はこの二つの体験に基づき、それぞれについてルポルタージュと小説を記している。まずは、それらのテキストについて検討してみたい。

まず、土地改革について見てみよう。王西彦は、1950年9月頃より、工作隊隊員として湘東（湖南省東部）平江県老蘇区の土地改革運動に参加する。さらに翌年冬にも「浙江大学土地改革団」の副団長として皖北（安徽省北部）五河県の老根拠地に赴いている。このうち湘東の体験については、現地で書き連ねたルポルタージュが『湘東老蘇区雑記』⁶⁾として世に出ている。ここでは筆者が目にするのができた新文芸出版社版について見てみたい。

同書には「喜悦和感激（代序）」と「後記」を除けば全部で九篇の文章が収められている。これらのほとんどすべてが、現地の農民の経歴や土地改革当時の様子の描写に費やされている。いかに地主の搾取を受けてきたか、またソヴィエト崩壊後の国民党軍の殺戮など、農民の口から語られる彼らの過去の苦しみ、とりわけ多くの紙幅を占めている。そして彼らの口からは時折共産党や毛沢東への賛美も語られる。王西彦が40年代に書き連ねてきた出口のない人物像は、ここでは共産党、毛沢東という光明を与えられるのである。

しかしながら、ここでは王西彦の自らの知識人としての立場に対する反省や、土地改革に際して得た感想はあまり記されていない。つまり、工作隊への派遣に、恐らくは王西彦自身の改造という目的が含まれていたと思われるのに、こ

5) 長沙「解放」(1949年8月)後、夏休み明けに民国大学中文系と湖南大学中文系の教授となる。建国後、1950年4月、武漢大学中文系教授となるが夏には湖南大学教授に復任、1951年3月には杭州の浙江大学教授となり、翌年初めには合併により浙江師範学院中文系主任となる。さらに1953年2月には華東師範大学中文系に転じ1954年4月になってはじめて専業作家となる。

6) 王西彦『湘東老蘇区雑記』(新文藝出版社、1952年)。これは、もともと長沙・湖南省文学芸術界聯合会籌備委員会から1951年3月に出版されたもの(未見)を増補・再版したものである。

こにはそのような影は見て取ることができない⁷⁾。また、王自身が土地改革において果たした役割が、ここからはあまり見えてこない。従ってある意味で、王西彦は40年代の知識人によって民間・民衆を表象するという立場から、そう離れてはいないと言えよう。

ここで、その後の王西彦と農村との関わりを見ておこう。彼がこの後（国内の）農村に滞在するのは、1958年に故郷の義烏に帰省した時のことである。後の回想によれば、予想に反し日々の糧にも事欠き、あるいは失明し呻く親戚たちの姿を目にするだけだったとのことである⁸⁾。翌年の1959年には、華東師範大学中文系と共に上海近郊の農村に「下放」したが、教育の成果は何もなく、一方で家畜を飼う自由を剥奪され、私生活を許されなくなった農民の姿を目にしたという⁹⁾。

王西彦が土地改革を題材にした小説『春回地暖』を完成させたのは、これらの農村体験の後、1962年のことだった。しかし、小説では土地改革には触れられていても、王西彦が目撃したはずの高級合作社、人民公社については触れられていない¹⁰⁾。

この『春回地暖』は、単純な農民賛美、共産党賛美にはなっておらず、また

7) 「[前略] 複雑な政治的背景をもつ知識人幹部にとっては、土地改革への参加ということ自体が自らの家庭背景に対立する行為であり、それは単なる国家事業への協力という次元を越えた、優れて思想的な意味を帯びた行為とならざるを得なかった。」(田原史起「中国土地改革工作隊の基礎的研究——1950年期土地改革における農村基層工作の機能」(『一橋研究』第20巻第1号、1995年) 98頁)。田原によれば、49年北京郊外での土地改革に参加した哲学者・馮友蘭が参加の動機として「自分の心の中に潜む感情との闘い」を挙げているという。

8) 王西彦『焚心煮骨的日子——文革回憶録』(香港崑崙製作公司、1991年)、165—166頁。

9) 同上。王西彦は1958年の体験を生産合作社が初級から高級に引き上げられるとき、としているが、実際にはちょうどこの頃「大躍進」政策が開始し、土地によっては人民公社化も進められていた。

10) 王西彦『王西彦選集・第四巻』(四川文芸出版社、1986年) 所収。但し、同書には1956年2月23日初稿と記されている。これが当時すぐに出版されなかった事情については王西彦は何も記していないが、もしかすると翌年の反右派闘争の影響があったかもしれない。むしろここで注目したいのは、1962年になってもまだ10年以上前の材料を用いてしか農村を表せなかった、あるいは新たに農村を題材とした小説を書けず、土地改革を扱った旧作を改作するしかなかったという点である(いわゆる大連会議で邵荃麟が農村の中間状態を描くべくだとした「中間人物論」を唱えるのは、この5ヶ月後、1962年8月である)。

『湘東老蘇区雜記』を連想させるような実際の体験に基づくと思われる部分もある。王西彦が後に述べた言葉を借りれば、「私は確かに自分の作品『春回地暖』において当時の農村の姿をより明るく描こう、とりわけ英雄人物幾人かの高大な姿をしっかりと造りだそうと思った」が、「書き始めるや、手の中の筆があまり言うことを聞かず、自分の指示に完全には従おうとはしなかった」¹¹⁾とのことで、結局のところ農民の積極性、消極性を含むさまざまな姿を描いている。そして、このことは「英雄人物を造りだしていない」「農民の保守性を描いている」といった批判を浴びたという¹²⁾。また、この小説に対する評論(上海の新聞と北京の雑誌)や映画化の予定は、政治的背景によって日の目を見ることはなかったという¹³⁾。

続いて、朝鮮戦争と王西彦の関わりを見てみよう。先に触れた土地改革をめぐるルポルタージュや小説における農民たちの会話などからも、すでに朝鮮戦争の影を認めることができる¹⁴⁾。王自身が朝鮮の地に赴いたのは、1952年9月から同年末、1953年5月から8月までの二度である(二度目は板門店の停戦協定署名の現場にも立ち会っている)。そして彼は二度目の帰国後すぐに朝鮮戦争を描いた散文報告集『為了祖国和人類』を完成させる。同書には、「自序」と付録を除けば全部で八篇の文章が収められているが、そのすべてが中国人兵士(看護婦等を含む)の姿を描き、褒め称えたものである。興味深いのは、同書に「付録之二」として付された「戦闘的文芸」という文章である。ここで王西彦は、志願軍の文芸活動を賞賛するのだが、ここで触れられる文芸活動の内容は、語り物や歌謡など、「群衆の好むもの」であり、この活動の特徴として王は「鮮明な戦闘性」と同時に「高度な創造性」を認めている。すでに拙稿「『民間』の表象」で見たように、王西彦は40年代においては民間の旧形式の抗戦の政治宣伝や大衆の啓蒙教育のための「利用」を、芸術上の問題とは無関係だとして切り捨てていたが、ここでは180度転換しているといえよう。

この散文報告集に続いて、1953年から1954年にかけて彼が書き連ねたのが短

11) 王西彦「關於『春回地暖』答読者の問」(前掲『王西彦選集・第四卷』、920-921頁)。原文は以下の通り。「我的確想在自己的作品裏把當時的農村面貌描繪得光彩些，特別是要好好塑造出幾個英雄人物的高大形象。[中略]從一開始，我就發覺手裏的筆不大馴順，不肯完全聽從自己的指揮。」

12) 同上、919頁。

13) 前掲『焚心煮骨的日子——文革回憶錄』、16頁。

14) 特に、『湘東老蘇区雜記』に付録として収められた「為了和平的戦争」は、土地改革の闘争と朝鮮戦争を結びつけ、熱烈に戦争を支持する文章である。

篇小説集『朴玉麗』である。短篇小説集ではあるが、実際には『為了祖国和人類』とのエクリチュールの違いはほとんど感じられない。異なっているのはこちらで描かれているのが中国人兵士ではなく朝鮮人女性だという点である。王西彦がこれ以前も意識的に小説中に女性を描いて来たことは拙稿「『同化』と『母性』の狭間で」ですでに触れたが、これまでの女性が戦争と母性の中で立ちすくみ、明るい解決策を与えられていなかったことに比べると、ここでの女性はみな若く未婚で母性に悩むこともなく、戦争に対する態度に何らの迷いもなく、明るさに満ちている。

以上、王西彦の土地改革、朝鮮戦争との関わりを概観した。以前と同様、作家として農民、兵士、朝鮮女性を表象する、という立場には変化がないものの、以前の拙稿で述べてきたような民国期の王西彦のテキストにみられた特徴が、人民共和国成立とその後の政治的事件に伴い大きく変化していることに留意しておきたい。

文革までの活動

一般的に言って、中国の30年代からの作家の創作活動を概括する時、中華人民共和国建国後の、なかんずく文化大革命以前の文学は、成果のない時期として切り捨てられることが多い（もちろんそれは政治的な原因により創作の自由が失われたとことに起因する——そもそも「政治」から自由な創作など存在するのかという疑問はさておくとして）。

王西彦自身、文革終息後、数多くの回想文を書いているが、50年代以降の小説について彼が回顧したものはあまり多くない。そんな中で、50年代以後の自分の小説について比較的多くを語っているのは、「為同時代人造像」¹⁵⁾という文章である。この中で、彼は50年代中期の中短篇のうち、「艱辛的日子」等四篇を挙げている。「艱辛的日子」は古い思想の重みを振り払おうとする歴史学教授を描いたもので、彼自身満足しているようだ。しかしながら他の三篇は、新しい生活環境に対する賛歌を歌ったものであり、浅薄であると見なしている。

王西彦のような、常に暗黒を描いてきた作家が、賛歌を歌い始めざるを得なかったのは、もちろん知識人に対する大小の度重なる批判キャンペーンと無縁ではないだろう。王西彦自身、これらの批判キャンペーンにおいて、批判に加わることを余儀なくされているのだ。例えば、1955年の胡風批判においては、

15) 『文藝理論研究』1984年第1期。

新聞や文芸雑誌に胡風を批判する二篇の文章を発表している¹⁶⁾。また、1957年から翌年にかけての反右派闘争でも『文匯報』に二篇の文章を発表し「右派」を批判している¹⁷⁾。また、反右派闘争当時、批判を受けた翻訳家・傅雷の上海作家協会における批判大会で、発言の機会を与えられ（彼自身によれば、これは自分のような人間にとって、これは関所から解放されたのに等しかったという）、批判を行ったことを後に告白している¹⁸⁾。また小説創作上でも、先述の「為同時代人造像」の中で彼自身が告白しているが、1958年に彼が発表した「風暴」¹⁹⁾という小説は、反右派闘争を反映しようとしたものだが、「これは当時の作者の頭が冷静さを欠いていたことを証明するだけで、自分がかねてから遵守してきた現実主義の法則に反してしまった」²⁰⁾という。

このように、王西彦は以前からの「現実主義」と、共産党の政策との間で折り合いをつけながら創作を続けていたようであるが、やがて彼自身も批判を免れない時がやってくる。彼は、『人的道路』を改作した『在漫長的路上』を1960年に脱稿し、1962年に出版する。この書が辿ったその後の運命については、王西彦自身の言葉を見てみよう。

——1964年後半、文学界は「中間人物を描く」についての討論を繰り広げており、上海作家協会が一連の座談会を催した際、まず私の長篇小説『在漫長的路上』と、少し前に女流作家茹志鵲の作品についての座談会で私が行った「有関茹志鵲小説的幾個問題」と題する発言が参考資料としてみんなに配られたが、これは明らかに批判のために供するものと考えられていたのだ。座談会のテーマは、社会主義文学は高大な英雄人物を描くべきであり、中間人物を描いてはならないというものだった。ところが私の『在漫長的路上』の主人公は、まさに中間の状態をさまよう知識人であり、一方「有関茹志鵲小説的幾個問題」ではこの女流作家の描く普通の人物を褒

16) 王西彦「嚴厲鎮壓胡風分子、保衛我們偉大的革命事業」（『新民晚報』1955年6月21日）、王西彦「嚴重的教訓（總題 堅決徹底粉碎胡風反革命集團）」（『文藝月報』1955年第6期）。

17) 王西彦「基調和主流——批判王若望在文學問題上的右派言論」（『文匯報』1957年8月14日）、王西彦「紀念魯迅、反擊右派！」（『文匯報』1957年10月18日）。

18) 前掲『焚心煮骨的日子——文革回憶錄』、55—56頁。

19) 『收穫』1958年第3期に発表。

20) 原文は以下の通り。「他只能證明當時作者頭腦的缺乏冷靜，違背了自己所尊奉的現實主義原則；」

め称え、さらに、いわゆる「英雄人物」とは決して生まれながらにして高大な姿なのではなく、彼らも普通の人の中から成長するのだと述べていた。従って、私は降りかかるであろう批判に対して心の準備をしていた。ところが最初の数度の座談会ではこのような状況は現れず、三度目か四度目になって、討論が進むうちに突然ある人が私に対する襲撃を開始し、かなり厳しい口調で『在漫長的路上』の問題を提起し、「この作品の大事なところはプチブル知識人を賛美し、ブルジョワ改良主義の道をたたえることである。この中の革命闘争の描写は単なる一種の装飾であり、保護色ですらある」としたのである。この批判者本人が、以前私に対して面と向かってこの小説についてお世辞を言い、これは「とても価値のあるよい作品だ」と言っていたのだが。彼のこの第一撃に続いて他の人の爆弾も次々に投げ込まれ、私は息をつく暇もなく、進退きわまった感であった。例えば、ある批判者は字面だけを見て推量し、題名にまでけちをつけ、次のように述べた。「ふん！「長い道[漫長的路]」！あんたが描いたのは解放戦争の頃の話で、あの頃はもう解放は目の前だったじゃないか？なんでわざわざ「長い道」なんて言おうとするんだ？あんたの下心はどこにあるんだ！」私は批判されて言葉を失い、五里霧中に迷い込んだようだった²¹⁾。

21) 前掲『焚心煮骨的日子——文革回憶錄』、16—17頁。原文は以下の通り。

…一九六四年下半年，文學界展開關於“描寫中間人物”的討論，上海作家協會在舉行連續性的座談會時，先是把我的長篇小說《在漫長的路上》和不久前我在一次關於女作家茹志鵠作品的研討會上所作題為《有關茹志鵠小說的幾個問題》的發言，作為參考資料發給大家，顯然是認為可供批判之用。座談會的主題是，社會主義文學應該描寫形象高大的英雄人物，不能描寫中間人物。而我寫的《在漫長的路上》的主人公，正是一個徘徊於中間狀態的知識分子，《有關茹志鵠小說的幾個問題》則對出現在女作家筆下的普通人作了贊揚，並指出所謂“英雄人物”決不是一出娘胎就形象高大，他們也是從普通人成長起來的。因此，我對可能遭受的批判做好了思想準備。不過在前幾次的座談會上並沒有出現這種情況，直到第三次或第四次，當討論正進行時，突然有人發動對我的襲擊，用一種十分嚴重的口吻提出《在漫長的路上》的問題，認為“這部作品的要害是讚美小資產階級知識分子，歌頌資產階級改良主義道路；其中關於革命鬥争的描寫只是一種裝飾品，甚至是一種掩護色。”正是這同一位批判者，曾經當面恭維過這部作品，說它是“十分難得的好小說”。經過他開這第一炮，別人的炮彈就接二連三地轟擊過來，簡直使我應接不暇，啼笑皆非。例如有一位批判者望文生義，竟挑剔起作品的題目：“哼！《漫長的路》！你寫的是解放戰爭時期的故事，當時不是解放就在眼前了嗎？為甚麼你偏要說是《漫長的路》？你的居心何在！”我被批判得啞口無言，如墜五里霧中。

「陰鬱なドン・キホーテ」で私は『在漫長的路上』へと改作される前の『人的道路』について、「簡単に共産党への投身という解決策が与えられる」と述べた。実際、以前の王の小説に比してかなり図式的な印象は否めない。『在漫長的路上』への改作は、政治背景の説明を共産党の当時の認識に近づけたり農民たちの暴動や蜂起の場面を増やしたのみならず、登場人物が増えると同時に描写もより精緻になり、あまり図式的な印象は受けなくなっている²²⁾。それだけに、「中間人物」を描いたという批判は免れ難かったかも知れない。

中間人物論批判の時点で、文化大革命まであと2年足らず、まさに「山雨来たらんと欲して風楼に満つ」という状況であった。翌1965年の暮れには『海瑞罷官』批判が始まり、まもなく三家村批判へと発展する。50年代半ば以来王西彦と親しく往来していた翻訳家・羅稷南は、批判会において齒に衣を着せず『海瑞罷官』や三家村グループを擁護、やがて批判の対象は羅稷南自身へと向けられた。王西彦自身も彼と親しかったことから発言を求められ、不本意ながら彼を攻撃したという。これは1966年5月のことだった²³⁾。が、間もなく攻撃は王西彦自身の身の上にも降りかかるのである。

文化大革命

文化大革命の開始時期をどこに求めるかには様々な異論があろう。1966年5月7日の毛沢東の林彪宛書簡「五・七指示」、さらには彭真らを解任する「五・一二通知」、そして八月の8期11中全会における「プロレタリア文化大革命における決定」などを経て文化大革命の発動が本格化していく。王西彦は上海作家協会の中で、文革で一番最初に批判された文学者であり、それは1966年6月11日のことであった。その後の文革中における彼の遭遇については、回想記『焚心煮骨的日子——文革回憶録』²⁴⁾に詳しい。

同書に従ってその後の経過を見ておこう。「反党反社会主義分子」とされて最

22) 『人的道路』では、共産党の地下活動を行っているとおぼしきかつての友人から主人公が手紙を受け取り、そこに書かれた彼の「個人主義の夢」への徹底的な批判を読み、主人公は目覚め、共産党の下へと旅立つ。『在漫長的路上』では、検閲を欺くため、いささかの政治的な臭いも感じさせない手紙が送られる。後者では、主人公の「個人主義」から共産主義への変化は図式的に描かれず、環境に迫られ徐々に傾いていくものとして描かれている。

23) 前掲『焚心煮骨的日子——文革回憶録』、69—70頁。

24) 註8参照。

初の一週間は一日おきに批判大会に引っ張り出される。やがて釈明書を書く以外に作家協会の花園での労働を命じられる。同様の待遇であったのは、魏金枝、師陀、孔羅荪、吳強であり、巴金、柯靈、白危などは彼らは別の部屋であり若干待遇がよかった。が、やがて巴金の罪も「格上げ」され、王らと同じ「牛棚」に入ることになる。さらに1967年初め、張春橋が上海で「一月風暴」を発動、作家協会の「造反派」内部でも権力闘争が発生し、労働者作家たちがそれまで実権を握っていた詩人たちを追い落とし、彼らをも「牛棚」へと追いやった（これ以前を「前文革」、これ以後を「後文革」と称する）。この年中央の権力闘争や紅衛兵の活動は頂点に達し、紅衛兵の行動に対処する意味からも、「牛棚」を二つに分け、魏金枝、師陀、孔羅荪、吳強、巴金、そして王西彦の6人を「罪悪が極めて重い」「老牛鬼」として台所に入れた。ここでは厳しい管理が行われた。その内容は、各自が自ら記した「牛鬼蛇神×××」という名札を下げ、毎日三度整列して罪を詫び、さらには毎日「思想報告」「労働日記」を記す、というものであった。その間監督員や「革命小將」の暴力にさらされることも日常茶飯事であったという。やがて吳強は秘密監獄に送られ、「牛棚」には5人が残った。

1968年9月には彼らは作家協会から石門路にある建物に移動し、人民芸術院や青年話劇団と共に管理されることになる。ところが翌月には「工人毛沢東思想宣伝隊」と「軍人毛沢東思想宣伝隊」が進駐、彼らは農村（松江県辰山公社）に送られ農民の秋の農作業を手伝う。農村から戻った後、彼を待ち受けていた「工宣隊」の担当者はこれまでとは異なり、温和かつ同情的であったが、王は批判大会で罪を認めることができず、解放される機会を逸してしまう。しかしその数日後、担当者に呼び出された彼は、春節（旧正月）以前には彼を解放するとの情報を耳にした。が、実際にはそれは実行されることはなかった。王西彦によれば、そこには、上海作家協会は30年代の「黒線人物」（反動組織とつながりのある人物）の巣であり、一人として解放してはならない、という指示があったのだという。

1969年3月末に彼らはまた巨鹿路の作家協会に戻る。彼に好意的だった「工宣隊」の担当者は、右傾の誤りを犯したとして職場に戻される。やがて「寛嚴大会」なる会が開かれるようになる。これは「坦白從寬、抗拒從嚴」（自白する者は寛大に処置し、あくまで反抗する者は厳しく処分する）という方針から名付けられ、幸いにも魏金枝、師陀、巴金、王西彦らは寛大な処置を得ることができたが、実際には待遇はあまり変わらず、まだ「牛鬼」と呼ばれることもあった。そしてしばらくの間学習（毛沢東の詩詞などを暗記しテストを行ったり、

「样板戯」を革命材料として学ぶ)の期間を経て、1969年9月初めには再び松江県辰山公社に送られる。

農作業が一段落した後も彼らは引き続き現地で「学習」をさせられ、巴金は二度の批判を受けた。1970年3月になり彼らは海辺の奉賢県の「文化幹校」に送られる。ここでは巴金、そして文革早期に監獄に送られていた柯霊と同じ班であった。王西彦はこの頃長年の脊椎の疾患が再発したという。林彪事件が発生した後、1972年初めになり病が重くなった王西彦は帰宅を許される。この年8月、王西彦と運命を共にしてきた巴金の夫人・蕭珊が病没している。さらに「牛棚」を共に過ごした(高齢のため幹部学校には同行せず作家協会で掃除などをさせられていた)魏金枝が12月に没する。

王西彦自身の症状も重かったようだが、治療により回復する。しかし、まだかろうじて歩けるといふ段階で「文化幹校」に連れ戻されそうになる。その後も幾多の攻撃が待っていたが上海に滞在し続け、1975年8月、ついに「解放」を宣告される。ただ翌年の毛沢東没後にも批判大会が開かるなどしたが、ついに1976年10月6日、四人組は逮捕され、文革は終結する。

以上が、王西彦自身の回想から見た文化大革命の一部始終である。一言付け加えるならば、皮肉なことに彼と「牛棚」での生活を共にした孔羅蕪は、拙稿「『同化』と『母性』の狭間で」で見た「どぼと」論争の相手であり、ここでは女性の同化を主張しようが母性を重視しようが共に否定される、という結果となっている。

他の人の回想からも文革中の王西彦の様子を簡単に見ておこう。証言者は巴金である。

私は心から「罪を認め罪に服した」が、私と西彦とは異なっていて、彼はずっと納得できず、またずっと反抗していた。彼の罪名はもともと大きくはなかったが、反抗したために彼は苦しい思いを多く味わうこととなった。もし「四人組」が失脚するのが2・3ヶ月遅ければ、彼が「反革命」という帽子を被された可能性は非常に高い。1967年に巨鹿路の作家協会の「牛棚」にいた時、私と西彦は意見が合わなかった。言い争うわけにはいかなかったが、私は彼に対して心の中で不満を抱いていたのだ。当時は私に理があると思っていたが、2年後になってやっと分かった。そして今はもっとはっきりしている、彼は間違っていなかった、ということが。私たちの違いは私は神を盲信し、彼はそれほどは信じなかったということだ。例を一つ挙げると、私たちは「牛棚」で労働したり学習したり釈明書を書く

などして、毎日早朝から夜十時頃まで休む間もなく、時には昼食後座って居眠りをする事もあったが、監督組はこれを許さなかった。西彦はこれにとっても不満で、これはわざと人を虐げているだけだ、とてもこんなことはできないし、またこんなことを受け入れる必要もない、と主張した。私は、まじめに「改造」をするのだから、苦しみを恐れず、監督組のいかなる規定にも従わなければならないと思った。私はずっとこういう考え方をしていたのだ、すなわち苦行によって罪を贖う、という考え方を。しかし私から見ると、西彦は自分の罪を認めていなかった。今から見ると彼は私よりも冷静であったと言うべきであろう²⁵⁾。

王西彦は、文革においてもこのように自分の知識人としての基盤を失わぬよう努力したのだった。しかしながら実際のところ、この間は創作や読書など、知識人としての活動は許されるわけもなく、無意義な苦しい時間を過ごしただけであった。従って、彼は様々な評価を下される毛沢東を、「一生ずっとある種の不信のまなざしで知識分子に接した」、理性を抹殺しようとした人物として捉えている²⁶⁾。四人組逮捕の時点で彼は62才になろうとしていた。

文革後、王西彦は、小説創作を再開した他、大量の回想記や読書ノートを書き続けた。それらは今我々が彼の文学を研究する上で貴重な資料となっている。そして、1999年9月24日、彼は永遠の眠りについた²⁷⁾。

王西彦と近代の問題は、人民共和国にあっても知識人の基盤そのものが破壊されることにより、何も解決されることはなかった。中国の近代をめぐる問題は、今も我々の前に残されているのである。

25) 巴金「寫真話」、『巴金全集・第十六卷』（人民文學出版社、1991年）所収。

26) 前掲『焚心煮骨的日子——文革回憶錄』、299頁。また、王西彦氏は筆者との談話でも（毛沢東自身も知識分子ではなかったのではないかという筆者の問いに答え）、毛沢東の知識分子としての要素を否定、彼の知識分子に対立する要素を強調していた。

27) 筆者の下に上海市作家協会より送付された「訃告」の全文の日本語訳および原文を以下に掲げる。なお、ここでは王西彦の生年は1913年とされているが他の多くの資料では1914年とされている。

著名な作家、中国作家協会第四、五期理事・名誉委員、中国共産党黨員、第一・二・三・四期上海市政治協商會議委員、第五、六期上海市政治協商會議常務委員、元上海市作家協会副主席、病により治療の甲斐なく、1999年9月24日未明1時50分、華東医院にて不幸にも病没した。享年86才。王西彦同志は1913年浙江・義烏に生まれた。1931年文学創作を開始し、1933年北平左翼作家連盟に参加した。1940年福建の戦時省都・永安で月刊誌『現代文芸』の主編を務める。1945年以降、桂林師範学院、湖南大学、武汉大学及び浙江大学の教授を歴任した。1954年から上海で専業作家となり今日に至る。早期の作品は多くが故郷の農村生活を題材とし、苦難を深く味わった農民のために苦しみを訴えた。後期の作品は、多くが知識分子の追求と幻滅を題材としており、苦悶に陥った知識分子の様々な姿を描いた。晩年はさらに過去を回想する一連の散文を執筆し、「十年の災害」の間の知識人の辛い道のりを描き出した。彼の作品ははっきりとした現実主義の風格を備えており、情感に富み、同時に冷静な分析力も兼ね備えている。晩年の著作はさらに社会と人生についての理解を絶えず深めていたことを示している。彼は生涯文筆に勤しみ、作品は総計で800万字を越える。主要な作品に長篇小説『古屋』、『尋夢者』、『村野的愛情』、『在漫長的路上』、『春回地暖』等、さらに『王西彦中篇小説選』、三種の短篇小説選、回想散文集『煉獄裏的聖火』、『焚心煮骨的日子』等があり、また全五巻の『王西彦選集』も世に出ている。

王西彦同志の生前の遺言に従い、葬儀はすべて簡略にする。告別の儀式は行わず、追悼会も開かない。弔問や花かごは受け付けない。また遺骨は残さない。

王西彦同志の病の期間受けた気遣いや手助けについて、遺族は心より感謝を表する。訃報の通知まで。

著名作家、中國作家協會第四、五屆理事、名譽委員、中國共産黨黨員、第一、二、三、四屆上海市政協委員、第五、六屆上海市政協常委、原上海市作家協會副主席，因病醫治無效，於1999年9月24日凌晨1時50分在華東醫院不幸病逝，享年86歲。王西彦同志1913年出生於浙江義烏。1931年開始文學寫作；1933年參加北平左翼作家聯盟。1940年在福建戰時省會永安主編《現代文藝》月刊。1945年後歷任桂林師範學院、湖南大學、武漢大學和浙江大學教授。1954年起在上海任專業作家至今。早期作品多以家鄉農村生活為題材，為深受苦難的農民訴說悲苦。後期作品則多以知識分子的追求和幻滅為題材，描寫陷入苦悶的知識分子的多樣面貌。晚年更撰寫了一系列回憶的散文著作，刻劃“十年浩劫”期間知識分子的艱辛歷程。他的作品具有鮮明的現實主義風格，飽含情感，而又不失冷峻的剖析力量。晚年著作更顯示了對社會和人生的理解的不斷深化。他一生勤於寫作，作品累計逾800萬字，主要著作有長篇小說《古屋》、《尋夢者》、《神的失落》、《村野的愛情》、《在漫長的路上》、《春回地暖》等，以及《王西彦中篇作品選》、3種短篇小說選、回憶散文集《煉獄裏的聖火》、《焚心煮骨的日子》等，並有5卷本《王西彦選集》問世。

遵照王西彦同志生前遺願，喪事一切從簡：不舉行告別儀式；不開追悼會；不接受吊唁花籃、花圈；也不保留骨灰。

對王西彦同志在生病期間受到的關懷和照顧，家屬表示喪心的感謝。

特此訃告。